令和２年度岐阜県職業能力開発施設運営改革検討会
第１回木工芸術スクール部会　議事要旨

１　開催日時及び場所
　令和２年１１月６日（金）１３時３０分～１５時００分
　木工芸術スクール　視聴覚室

２　出席者
　野尻修二座長、井端清秀委員、藤原広行委員、浦西正幸委員、片岡紀子委員、岩田昌弘委員、滝村昌也委員、坂本則幸委員

３　事務局
【商工労働部】
　次長、労働雇用課人材育成係主査
【木工芸術スクール】
　校長、訓練課長、管理調整係長、主任技師（途中退席）

４　会議の概要
・あいさつ
・資料説明
・意見交換

５　主な意見
○地元企業による訓練生向けの企業説明会が中止になったというが、今後はオンラインを開催することも検討すると良い。
○一年間を費やして訓練を受けた後の就職が保証されなければ入校生は増えない。もっと「こういう企業へ就職できますよ」というアピール（発信）が必要。
○就職支援について、「求人」にとらわれない視点も必要。求人を出していなくても良い人材であれば企業は採用したいので積極的にチャレンジさせることが必要。
○地元家具メーカーとは、訓練生の就職に関する事以外の「交流」が必要
○企業としてはインターンシップも飛騨の家具メーカーの良さを知っても

らうために実施しており、企業説明会も交流の場と捉えている。
○訓練生はＯＢの声を一番聞きたいので「ＯＢ会」または「ＯＢ交流会」のようなものがあると良い。
○訓練生の未来に向けて参考になる手助けが「就職」だけではなく他の形でできれば良い。
○（就職や入校はコロナ禍に左右されるため）卒業するときにどれだけ技術を上げ、スキルを持たせられるかということだけを考えるべきである。
○一年で卒業するのではなく、ここで技術を磨いてタイミングを見て、今だったらここの企業に行けるというようなことができたら良いのでは。
○近場の高校生を集めることは、強みになるので続けていくべき。
そのためには広報の比率を変え、県内の高校への広報比重を増やすべきである。
○技術を磨かなければいけない学校においては、コロナ対策も重要だが、「思い切る」部分も必要。感染防止を気にし過ぎるあまり、技術が身に付かないようではいけない。
○スクールのパンフレットに書かれている就職先は会社名しか書かれていない。私立学校などは何年度に何人と具体的な実績数字を出しており、そこまでの情報を出さないとホームページまで見に来てくれない。
○木工基礎を学ぶ１年間の後に、オプションで専攻科のようなものがあり、数名がそこへ進級して、ずっとインターンシップに出すような形にすれば（二年制の課題である）収容能力の問題は起きないのではないか。
○卒業生だから分かるが、スクールで好きなことを勉強できる１年間はとても楽しい。２年制であれば、失業保険を受けながら充実した訓練を受けられるので歓迎する人も多いと思う。
○現在のスクール生の就職志向は多様化しており、家具メーカーか木工所かという二択ではなく、小売や修理なども希望が多い。
就職率を上げるためには、一見家具と関係ないが家具の技術が必要な業種へも就職先を広げることが必要。
○過去５年間に４０人以上が県外から高山に移り住んでいると聞いたが、木工芸術スクールあればこそである。家具産地である飛騨にこのようなスクールがあることは大きな魅力。今後もそれぞれの立場で応援したい。